

東北学院大学と連携した講座作り実習の取り組み

仙台市中央市民センター 今川義博

平成8年度から継続している東北学院大学と連携した講座づくり実習の取り組みについて、市民センターの実習担当者の立場から、受け入れの経緯や成果などを紹介したい。

1. 仙台市市民センターについて

仙台市の市民センターは社会教育法で規定されている公民館にあたる。市民センターと名の付く施設は全国各地にあるが、大きくみれば社会教育施設である公民館としての性格をもつものと、多様な用途に利用される市民利用施設としての性格を持つものに分けられる。政令市では、福岡市の市民センターが、仙台市と同様に公民館として、その他の市の市民センターは、市民利用施設として位置付けられていることが多い。

仙台市では、平成元年の政令市移行時に、それまで存在していた市民利用施設としての市民センターと、社会教育法上の公民館の両者が統合された。その際、施設の名称は市民センターとされたものの、施設の性格は、市民センター条例の第1条で「社会教育法24条に基づく施設」、すなわち公民館と規定された。平成15年9月現在、ほぼ中学校区に1館の割合で、57の市民センターが設置されている。

2. 講座づくり実習導入の経緯

講座づくりを取り入れた社会教育実習を行うに至った経緯について説明したい。平成7年に東北学院大学から依頼があるまで、仙台市の市民センターでは社会教育実習を受け入れた経験がなかった。直接の窓口であった筆者は、「実務体験実習」をイメージし、「実習に来た学生の世話を1週間しなくてはならない」という思いが先に立ち、自分の抱えている仕事との兼ね合いもあり、諾否の返事を躊躇した。

当時の所属長と相談をしたところ、受け入れの指示が出されたことから、実習のプログラムを真剣に考えることとなった。単純な実務体験実習では負担が増えるだけで担当者として面白くない、こちらにも実りある実習、モチベーションを保つことができる実習にできないかと考えた。

その結果が、講座づくりを中核に据えた社会教育実習ということであるが、講座づくりを学生にさせることは、一般的に考えればリスクが大きい。「学生が考えることは突拍子もない」、あるいは「実際に講座の運営をさせるのは受講者に失礼だ」といったイメージを持たれてしまう。そのため、通常の施設体験実習などで講座づくりが組み込まれていることがあっても、シミュレーションとして企画を行わせる程度で、講座を企画し実際に運営し、事業評価、報告書作成までを組織的に行うところはなかったのではないだろうか。しかしながら、私の考えはこうだった。

「学生に企画・運営させることで、市民センター職員の発想し得ない、特に市民センターの利用者が少ない若者対象の講座の企画が生まれるのではないか。」

「マンネリ化しつつある市民センターの事業運営に一石を投じ、事業の活性化に繋がるのではないか。」

当時の所属長にこのような趣旨を伝えたところ理解を得ることができたことから、デメリットよりもメリットに期待をしつつ、全国初の試みとして講座づくり実習を進めることになった。

3. 運営にあたって

指導に当たっては、できる限り学生に自由に発想させ企画を立てさせることを原則とした。指導者があまり手を出しすぎると、学生の感性を殺してしまい、学生が企画した意味がなさなくなるからである。しかし、そうはいつても、市民センターの主催事業として講座を実施するわけで、一定の質を保たなくてはならず、「これなら実施できる」という一定のレベルを想定し、そこに到達するまで企画を練ることを、担当者である自分自身にも学生にも科すことにした²⁾。

その結果、従来市民センターが扱ってこなかったテーマや内容、手法を取り入れた講座が企画され実施に移された³⁾。例えば、平成11年に開催されたイベント型の音楽講座は、学生の世代とその親の世代との交流をねらいの一つに置き、「良い音楽は不滅です」といったような思いを、世代を超えて共有しあう講座になった。具体的には、会場をスタジオ風に仕立て、DJや講師による解説を中心に、ジャパニーズポップスの原点を探るために、60年代・70年代の様々な海外ポップス音楽を試聴し、それが現代の日本音楽のどの辺りに

影響を与えているかなどを解説しつつ、進められた。

この講座のきっかけとなったのが、企画の際に交わされた次のような学生のやり取りである。

一人の学生が「最近、家にいるときに、良い感じの音楽がきこえてきたので、誰が聞いているのかと思ったら、お父さんなんだよね。で、『その曲何?』って聞いてみたら、60年代の音楽だったわけ。『おまえも聞くか?』って言われて、CD借りて聞いてみたら、結構いけるじゃん。マイブームなんだよねえ。」と父親世代の音楽を評価した話が出た。それを受けて他の学生が「そうそう。いろんなCMがあるでしょう。ああいうので使っている音楽って耳に残るし、いい感じじゃない。でも、最近の音楽で似てるのがあるんだけど違うみたいで、何かそういうのって知りたいよね。もしかしたら、自分たちの父親世代がよく知っていたりするのかしら」とこたえた。

このとき、自分が忘れていた講座を企画するときの発想の原点みたいなものをあらためて感じた。このような若者の感覚・発想が私たちに良い意味で刺激を与えたことは言うまでもない。

4. 講座づくりを取り入れた実習の成果

このような刺激が、担当者である私自身の講座の企画に影響を与えていくわけであるが、組織として受け入れている以上、市民センター全体としてどういう成果があったかということが大切になる。

当初のねらいの一つである、学生の視点からプログラム開発を行い市民センターの事業の活性化を図るということに関していえば、この音楽講座（J-POPSの講座）が次年度に8回シリーズの講座へと発展し、これ以外にも、シルバーアートや盲導犬講座などが、その後の市民センター事業で取り入れられた。このように、ある種実験的な事業として学生企画講座が位置付けられ、その結果を受けて、市民センターの新しい講座が展開することができたことが、実習の成果の一つとしてあげられる。

また、講座づくりの活動は、直接的には仙台市中央市民センターが担当したが、社会教育実習の期間の一部については、学生を市内5区の拠点市民センターに配置し、実務中心の活動を体験させていることから、それぞれの施設でも実習に関わる職員が実習の指導を

通して、学生からさまざまな刺激を受けている。そのような意味では、明確な形として残らないような成果もあると思われる。

なお、平成15年度は、市民センターでの実習を希望する学生が多かったことから、4～5名で一つのグループを編成し、ほぼ、実習の全期間、学生を各拠点市民センターに配属し、各センターごとに講座づくりの指導を行った。

5. 今後の課題

(1) 講座づくり実習を生かすための課題

東北学院大学と仙台市中央市民センターが連携・協力して運営している社会教育実習は一定の成果をあげつつも、それはまだ十分とはいえない。先に述べたように、一部の企画は、次年度の講座企画の際に参考にされ、新たな市民センター事業を産むきっかけとなったが、その数は決して多いわけではない。その原因の一つが、学生の企画講座の取り組みに対する市民センター職員の認識不足にある。学生の企画講座のちらしや彼らが作成する報告書が、職員の目に触れることは少ない。そのため学生のアイデア等が職員に広く伝わっておらず、学生の講座づくりという、いわば実験的な取り組みを通して、市民センター事業を活性化するという当初のねらいを達成するということにまでいたっていない。

今後は、毎年度実施している実習の成果発表会を、職員研修の機会の一部として位置付けることや、各センターへ配布する学生作成の報告書が多く職員の目にとまる工夫をすることにより、職員への周知を図る必要がある。とりあえず、今年度はそのような取り組みから行うことを考えている。

(2) 公民館活動からみた大学への要望

最後に、大学一般に対する要望を2点述べてみたい。

① 大学と地域の施設・機関による新たな実習プログラムの開発

多くの大学で行われている社会教育実習は、実務の補助業務を中心とする「施設体験実習」である。そのような中で、今回紹介した講座づくり実習が8年間も続いているのは、社会教育施設に働く職員が、次代の社会教育を担う人材の育成を、自らの役割であると考えているからである。これは、社会教育実習を受け入れていく大前提である。

しかしながら、その実習が単なる施設職員の補助的業務の体験、たとえばコピー取りや資料づくりをさせることだけになっては、学生の将来にとって意味ある活動になるとは思えない。もちろん、1回の講座づくりを体験したからといって、社会教育の仕事に従事できる能力が十分に身に付くというわけではない。しかし、講座終了後の彼らの感想や報告書を読む限り、その一端が身についたり、社会教育関係の仕事への意欲が強くなったりすることは間違いないように思われる。しかもそれは、関連する職業に就かない場合であっても役立つ資質・能力ではないだろうか。その意味でも、社会教育の領域に限らず、大学以外の場で行われる実習では、いわゆる補助業務だけではなく、学生が主体的に考え工夫して活動を行うといったプログラムを、大学が実習先の施設や機関と連携して開発することを期待したい。

② 地域課題の解決に向けた大学と公民館の連携

もう1点は、実習とは直接関係しない話であるが、大学と社会教育施設との連携についての要望である。今日、開放講座など、開放事業を実施している大学が数多くあるが、一方で、公民館等でも、従来から大学開放講座と類似した内容の講座を実施してきた。しかし、これまでは、大学と公民館等の役割分担などを全く考えずに進められてきた。

このような状況を踏まえ、大学が、地域への機能開放をすすめるときに、その地域の公民館等施設や機能をもっと有効に活用すること、上手な役割分担することなどを期待したい。大学が、独自に開放講座を実施することを否定するものではなく、今後も生涯学習の進展のためには、市民・地域住民に向けて、多くの講座が実施されることは重要だと考える。その一方で、これからの時代の生涯学習社会に必要なのは、地域課題の解決に向けた地域住民自らの取り組みと、それを学習面で支える諸施設・機関の活動であるとも思う。なかでも公民館は、地域とのつながりが強く、地域課題の解決に向けた取り組みを従来から行ってきた。また、今後積極的に関わろうとしている公民館も多い。しかしながら、このような取り組みには、その地域にある大学等の専門機関の力が必要であり、大学と公民館が協働して取り組むことが重要だと考える。

まずは、大学とその地域の公民館が、互いの営みを理解し合い、様々な情報交換をすることからではじめ、両者の関係がすこしずつ発展していくことを望みたい。

注)

- 1) 本稿は、東北・北海道地区大学一般教育研究会第53回大会（日時：平成15年9月11日、会場:東北学院大学）において発表した内容を、一部追加・修正の上まとめたものである。
- 2) 講座づくり実習の具体的な進め方については、本誌に掲載されている水谷修氏の「互恵を原則とした地域と大学との連携」を参照のこと。
- 3) 社会教育実習の一環として学生が企画・運営した講座は、以下のとおりである。

表3 東北学院大学社会教育実習生による講座一覧（平成8—15年度）

平成8年度	「面倒くさがり屋さんのための手を加えた超簡単格安料理講座」 インスタント食品、コンビニに弁当に頼りがちな若者の食生活の改善を目指して、超簡単（10分1品）、超格安（1品300円）で栄養価の高い料理を実習により学ぶ講座
平成9年度	「休日のリラックス教室～香りで癒す休日の午後～」 時間に余裕がなく疲れている若者のために、関心の高いアロマセラピーを利用して短時間で疲れを回復させ、リラックスした時間を過ごすことができるようになるための講座 「MUSIC EVENT 90's back to the 90's」 90年代の音楽のルーツを60年代の音楽から探ろうとした講座で、60年代に青春時代を過ごした親世代と、90年代に青春時代を過ごしている若者の世代間交流を図ることが目的
平成10年度	「そば道場」 そば作りの体験をとおして、もう一度自分の食に対する考えを見直そうという講座 「SILVER ART」 ブームになりつつある素材「アートクレイシルバー」を用いて、オリジナルなものを作製し、ものの大切さを考える講座
平成11年度	「ケイゴクリニック」 敬語の使い方がわからない、面接の際に困るといふ若者のために、講義と実践をとおして敬語の基本的な使い方を学ぶ講座
平成12年度	「盲導犬のこと知ってる？」 盲導犬に触れながら、視聴覚障害者のバリアフリーについて考える講座
平成13年度	「発掘！アルハラ大酒典」 講義、パッチテスト、グループ討議をとおして、体質の確認、お酒の飲み方、すすめ方、アルコールハラスメント防止の対策を考える講座
平成14年度	「特麺リサーチ2002～食べて健康！？インスタント麺～」 若者の食生活で欠かすことのできなくなった即席麺を、ひと工夫することでおいしく健康的に食べるコツを学ぶ講座 「色のイロいろ★カラーとインテリア」 生活に密着した「色と住環境」に焦点をあて、イロが及ぼす心理的効果について考える講座
平成15年度	「ここがへんかも！？日本人～アルコールハラスメントは日本人だけ～」 外国人によるパネルディスカッションや、グループ討議をとおして、若者のアルコールハラスメントについて考える講座

「秋のcoffee講座」

幅広い世代に親しまれているコーヒーを取り上げ、淹れ方の技術、知識の習得をとおして、世代間交流を図る講座

「Doyouknowデートレープ？」

親しい関係の二人の間に起こる、同意のない性行為がおきる原因と防止策について、ロールプレイを交えて考える講座

「バランス・アップ～健康な体になる講座～」

講和や健康度測定をとおして、若いうちに体のバランスの大切さを知り、今後の健康づくりに役立てるための講座

「ショウガで温（ON）」

若者にも受け入れられる生姜の新しい料理法を提案、地元の若い者と講師として招く婦人部の方々との交流を図る講座